

# ABIC 国際社会貢献センター

# Information Letter

No. 72 2025年4月

<b>研修</b>	インドネシア奨学生向けの社会課題講義	2
<b>外国企業支援</b>	香港科技大学生による日本企業視察研修プログラム (Japan Career Exploration Program) ツアー帯同を終えて	3
	NEPCON JAPAN 2025での通訳・営業活動	4
	今思うこと	5
<b>自治体・中小企業支援</b>	豊後道中膝栗毛	6
	グローバル時代を生き抜く女性のキャリア形成について	7
	栗津中学校にて生涯初めて教壇に立つ	8
<b>日本語学習支援</b>	在京外国籍高校生への支援活動	9
<b>留学生支援</b>	ABIC将棋教室	10
	留学生支援バザー	11
<b>事務局だより</b>	関西地区会員懇親会を開催	11
	会員の種類	12
	法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数	12
	賛助会員入会のお願い	12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)  
Action for a Better International Community

[www.abic.or.jp](http://www.abic.or.jp)

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1  
霞が関コモンゲート西館20階  
Tel : 03-6268-8604 Fax : 03-6268-8652  
e-mail : mail@abic.or.jp

(関西デスク) 〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24  
住友生命本町第2ビル9階  
Tel : 06-6226-7955  
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

## 研 修

## インドネシア奨学生向けの社会課題講義

やすい みのる  
安居 実 (元 三井物産)

2024年初め、ABICから三井物産インドネシア奨学基金の留学生向けにインドネシアの社会課題に関する講義を行う講師を公募しているというお知らせメールがあった。三井物産は1992年に同基金を設立し、インドネシアから毎年2人の留学生を日本に招致し、日本語教育を行った上で、大学入学試験合格後の授業料、生活費を卒業まで全面的に支援している。インドネシア全国の高校生が数千人単位で応募してくるので、わずか2人の枠に合格するのは至難である。その優秀な学生たちに、大学卒業時までにインドネシアの社会課題に関して考え、行動し、卒業時に発表してもらおうという新たな試みを、現在の大学2年生から行うことになった。これは、社会課題に向き合い、自らの経験や学問を生かして世界で活躍できる人材を育成することを目指したプログラムである。新しいサービスや事業を開拓し、日々変わっていく世界のニーズに対応していくというのも商社の重要な活動だが、社会貢献の一環として、直接若人の学業やその志を支援していく活動もあっていい。大学の学業にあまり支障がない範囲で、カリキュラムとは離れて、自国の社会課題に直接向き合い考えていく時間を持っていいし、それに関係する講師の講義・助言を聞くのも意味がある。

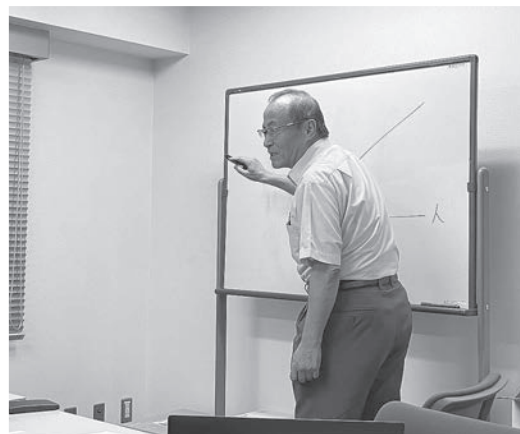
私は三井物産のプロジェクト本部に所属していたが、30歳代後半から40歳代にかけて11年、また同社に所属しながら50歳代にジェトロ（日本貿易振興機構）の経済連携アドバイザーとして1年半、通算12年半ジャカルタに駐在した。知りたいことは多く、教えることも好きで、若人も大好きなので、現在大手学習塾の講師を務めているが、年数回程度であれば、インドネシアの学生たちに日本語で

講義することもできるだろうと考えた。ABICへの応募資料には、中国経済に関してまとめた書籍の抜粋も付け、経済動向分析も行ってきたことも示した。

幸いに講師として採用ということになり、インドネシアの社会課題について何を話すか考え始めた。いくつかのテーマ候補を挙げた中から、6月の第1回の講義は「社会格差」を取り上げることを、関係先と相談の上決めた。インドネシアに限ることではないので、同国を強く意識しながら、米国、中国、日本および世界全体に広がる経済格差、貧富格差、教育格差、男女格差について俯瞰していった。社会全体の活気を保ちながら自由に活動しつつ、ある程度の平等を実現しなくてはならない。ジニ係数・累進課税、日本の過去30年にわたる非正規雇用労働者の増加とこれに伴う労働市場の課題、大学進学率と最先端技術（ノーベル賞）、内閣閣僚あるいは国会議員における男女比率など多岐にわたる分野で、データを示しつつ講義を行った。約十人の学生たちも熱心に聞いてくれた。

10月の第2回の講義は「人工知能（AI）」を取り上げた。AIの発展過程をレビューし、人間の知的活動分野を部分的に凌駕してきた歴史を振り返った。そして、特にインドネシアや日本における医療・教育分野でのAI活用事例を紹介し、今後どのようにAIと共に歩むのかを、社会課題の一つとして考察した。

じきに3回目の講義を行う予定だが、全力を尽くし、学生たちと共に学びたい。新しく始まったこの社会課題プロジェクトは、学生の自主的な学びと、主体的なアクションを期待しており、本活動を通じて、インドネシアのリーダーたちが育つ一助となることを祈っている。



インドネシア奨学生への講義の様子

## 外国企業支援

## 香港科技大学生による日本企業視察研修プログラム (Japan Career Exploration Program) ツアー帯同を終えて

いしかわ のりこ  
石川 典子 (元 イタリア貿易振興会在大阪事務所)

2025年1月中旬に、第16回となる「Japan Career Exploration Program (JCEP) —日本企業視察研修プログラム—」ツアーが、2週間の日程で開催された。香港科技大学キャリアセンター主催で実施されるこのプログラムは、香港のみならず、選抜されたアジアの優秀な理系・工学系およびビジネス系の学生30人を対象とするインバウンド型企業視察研修ツアーである。

私は、日本の大学で文学部哲学科美学美術史を専攻し、卒業後イタリアのフィレンツェ国立大学でジョットからティエポロまでのイタリア美術史を研究した後に、伊日間の商業通訳・翻訳に携わっていたが、2024年12月に国際見本市事務局からABICをご紹介いただき、活動会員として登録した。そして、このたびABICの紹介によりJCEPの通訳兼お世話役として関西ツアーに帯同することになった。

もとより本プログラムは、将来、日本で就職を希望する海外の学生が日本企業を研究し、日本企業の文化を理解することを目的として実施されてきた。そのため、日本企業の工場や企業ミュージアム、資料館の見学、ジェットロや日本企業の人事部とのディスカッション・セッションなど、4日間で9件の活動が盛り込まれるという忙しい旅程だったが、学生は最終的にサーベイ調査書を提出することになっているなど、素晴らしいプログラムだと思う。

ツアーは、香港科技大学の教職員スタッフ2人とロイタ株式会社の堀部CEOの引率により、込み入ったスケジュールも円滑に進行した。私が考えていたインバウンドツアーとは異なり、学生たちはそれぞれ自立しており、Z世代らしく学生たち全員がWhatsAppアプリ（日本ではLINEほど普及していないが、同様のアプリである）を使ってお互いが連絡を取り合いながらスムーズに行動していた。日本企業やジェットロとのセッションでは、日本でスタートアッ

プ企業を立ち上げるにはどうしたら良いかなどの活発な意見交換があった。日本が好きで日本語をうまく話す学生もいたが、ほとんどの学生は英語でのコミュニケーションである。日本で働く場合の問題点は何かとの質問には、日本語の難しさを挙げる学生も多くいた。

京都にある島津製作所の創業記念資料館では、多くの発明品や古いレントゲン装置が展示されていて、日本文化に詳しい学生は、これらの展示物に感銘を受け、多くの興味深い発見があったようだ。島津製作所の社章と島津家の家紋の関係など、かなり深掘りした質問もあった。私にとっても、香港の学生が士族の家紋の知識を有していることは新鮮な驚きであった。また、日本新薬の山科植物資料館では、冬で多くの植物が枯れていたものの、ヒョウタンやタバコといった珍しい植物を見ることができた。企業側から温室で育てたバナナを提供いただいたり、英語で会社概要を説明いただいたりと、とても丁寧に温かいもてなしを受け、学生たちは植物園見学を楽しんでいた。関西ツアーの最後に訪れた松井酒造の日本酒醸造所では、米国人社氏から英語で酒の発酵プロセスを説明いただき、その後の試飲会で学生たちは大いに盛り上がっていた。私はこのプログラムに参加できたことに感謝し、この後に続く東京ツアーが学生たちにとって有意義な体験となることを願いつつ、任務を終了した。



島津製作所 創業記念資料館



日本新薬 山科植物資料館 (右から2人目が筆者)



松井酒造前にて記念撮影

## 外国企業支援

## NEPCON JAPAN 2025での通訳・営業活動

たなか とおる  
田中 徹 (元 三井物産)

ABICからの派遣通訳として1月22-24日に東京ビッグサイトで開催されたNEPCONの展示会「第39回ネブコン ジャパンーエレクトロニクス開発・実装展ー」で活動した。NEPCONは35年以上の歴史を持つ大型展示会であり、電子部品R&D、製造・包装技術、自動車、ウェアラブル・デバイス、工場イノベーション、スマート・ロジスティクスの会場がビッグサイトの東館と南館に設けられた。今回の来訪者は全会場合わせ3日間で8万5千人規模であった。

2024年、定年後の再就職先での海外（ベルギー）勤務を終え、退職と同時に大学の後輩に勧められたABICに登録し、11月の川崎国際環境技術展で通訳の初仕事を終えた。その後、2025年3月のFOODEXでの通訳に応募していたところ、ABICから本展示会の案内があり応じた次第。

担当した出展企業は、NEPCONの中の第9回RoboDEX（ロボット開発・活用展）にブースを出していたXELA Robotics社。同社は早稲田大学教授で社長のDr. Schmitzが同大学の技術を外出して起業した設立7年目の新興企業で、ロボットアームの先端などに使える新型センサーの設計・製造を行う。従来のセンサーが圧（押し力）を検知するのにに対して、XELA社のNuSkinは3次元の圧を検知でき、「押し」力以外に「横移動する（滑る）」力も検知できる。また、感度がとても高く（0.1グラム圧に反応）、繊細なものをつかむことが可能となり、展示でもうずらの卵や折り鶴の羽根先をつぶさずに挟む技術を見せていた。同社は純粋な日本企業（本社は神楽坂）でありながら、20人ほどの社員のうち邦人は3人程度という国際色豊かな企業で、来訪客は外国企業と思っているケースが多かった。

ブースには社長のDr. Alexander Schmitz（オーストリア人）、CTO（Chief Technology Officer）のDr. Tito Tomo（インドネシア人、日本語片言可）、営業部長の鈴木氏（ロボット機器会社から2週間前に転職）の3人と私

とが待機。もともとのミッションはSchmitz社長、Tomo CTOの接客を通訳サポートするというものであったが、「自分たちが表に出ると（日本人客に）遠慮されてしまう」ということで、鈴木氏と私が並んで接客し、技術的な質問に対しては両氏に通訳しながら確認を行うという段取りになった。初日から想定を上回る来訪（80社以上）を受けて、Schmitz社長からABICへ「通訳の追加」依頼のSOSが出され、ABIC側の尽力で2日目午後からABIC活動会員の朝倉さんが加わるようになった。

ロボットはなじみのない業種だったので、展示会前週にXELA社の事務所を訪れ1時間ほど会社の成り立ちや製品の紹介を受けていた。それで私は大変助かったが、2日目から急きょ派遣された朝倉さんが私からの簡単な説明だけで行動を開始できていたのには感服した。

今後、自動車・自動車部品（EV車の樹脂部材）、電子材料（積層板など薄い部材）、青果物（選果）の取り扱いなどロボットに繊細な動きが必要となることから、同社の技術は来場客からとても興味を持たれていた（同社は2025年中の外注による量産を検討中）。意外な来客としては、ケーキのフルーツ乗せ（ショートケーキのイチゴなど）の自動化を検討中の有名大手菓子メーカーがあった。

結局、3日間連続で日々80社以上の来客対応を実施。Schmitz社長は「通訳の要員数を読み違えた」と話しておられ、ABICから緊急で追加要員を得られたことにとても感謝していた。

また、追加派遣の朝倉さんには短時間の商品説明だけで対応をお願いすることになったが、いみじくもおっしゃった「元商社マンだから商材がなんであっても対応できる」という点は同感であり、ABICからの派遣者ならではの貢献ができたのではないかと自負している。



XELA Robotics社のブースにて（左から2人目が筆者）

## 今思うこと

おかやま ひろよし  
岡山 裕吉 (元 National Australia Bank)

ABICの活動で外国人向けに日本語を教えておられる先輩から入会を勧められABICに登録した。そのABICから紹介され、縁あってTractus Asiaというアジアと北米で展開する投資コンサルティング会社の日本法人に入社することができた。入社して1年になる。

Tractus Asia社は、米国の州政府や政府系機関の経済開発部門が注力している本邦企業の対米直接投資の促進・誘致、その結果としての現地雇用の促進のための活動を日本法人に業務委託している。また世界各国の事業法人向けに事業戦略サポート、市場調査、事業再編サポートなどを行っている。

現在、私はペンシルベニア州地域振興・経済開発局の日本投資事務所代表として本邦からの投資促進活動を担当している。私は61歳で退職するまで二つの外資系金融機関に勤務し、法人向け金融取引に国内外で携わってきた。今の業務とは親和性があるのか、割とすんなり着地できた印象である。

退職後の過ごし方は人によってそれぞれだと思う。収入を得るといふ目的は重要な要素である。加えて私は、社会と接点を持って何かをやり続けていないとストレスになってしまう。内外の人との関係構築のハードルに呻吟しつつも、新しい関係を醸成する業務は決して嫌ではない。

先に述べたとおり、ABICは先輩からご紹介いただいた。この方は前々職の銀行で私が1994年にタイに赴任した直後、真っ先にお目にかかった総合商社の方だ。このように仕事、プライベートの出来事の多くが、以前からの知人との縁であり、偶然・必然の積み上げで出来上がっていると思う。

1990年の年末、結婚直後に新潟にスキーに行き、右足の関節骨折という大けがをしたことがあった。当時私はフランス系の金融機関に勤務する為替・デリバティブ取引のカスタマーディーラーであり、相当悩んだ末、外銀から邦銀への転職を試み内定をもらっていたが、大けがをして入

院したことで、その事案は流れた。一方、転職予定先の邦銀はその後の金融業界の激変によりなくなってしまった。あの時、妻から吹雪の中で「もう1本滑ろう」と言われて滑った結果骨折したが、同時に身をもって雇用の危機を回避できたのかもしれない。骨を折った

翌日に入院の便宜を図ってくれたのは医師になった桐生高校の同級生であり、三井記念病院の整形外科の先生のおかげで何とか普通に歩いたり、走ったりすることができている。これも人のつながりを思うところである。当時は結局転職せず、タイに赴任する機会を得た。アジアでの駐在期間は14年に及び、タイは第二の故郷のような存在となった。

2024年より勤め始めたTractus Asia社は、2人の米国人が90年代初頭にタイで創業したコンサルティング会社であり、またしてもタイつながりが戻ってきたと思った。2024年12月に同社のマネジメント会議がバンコクであり、久しぶりにタイを訪れた。弊社におけるジャパン・ビジネスも拡大の兆しが出てきている。

前職の時からおおむねそうなのだが、私は業務を別段緻密な計画の下に行っているというわけでもない。しかし、根気よくやっているとビジネスが寄ってくるようなことが結構ある。これも大体は人のつながりが功を奏することが多い。もちろん追い風ばかりの時はなく、そういう時は明るく耐えて次の追い風が吹くのを待つのである。



ペンシルベニア州ピッツバーグにて  
各国FDI担当と



タイの児童施設でのドネーションセレモニー  
(左から12人目が筆者)



バンコクにてTractus Asia社のシニアメンバーと

## 教育支援

## 豊後道中膝栗毛

いとう こう  
伊藤 衡 (元 インテル)

月曜朝7時30分、別府駅前発、立命館アジア太平洋大学 (APU) 行きのバスは、大勢の学生を乗せてひたすら坂を登り、約1時間かけて丘の上のキャンパスに到着する。2024年10月から約4ヵ月間、毎週日曜日は羽田から飛行機で大分に移動している。月曜朝8時45分からの「ロジカルシンキングとクリティカルシンキング」の授業を担当するためである。

この授業は日本語と英語の2コマ連続で、定員300人ほどの大教室で行う。月曜の朝一番の授業は、講師も学生も寝ぼけているので、まず論理パズルを出題し、議論をしながら考えてもらうことから始める。私は大学時代、数学者に憧れて数学科に入ったものの、1年生の解析学や群論の必修授業で落ちこぼれて、数学者の夢は早々に破れた。しかしその後も論理パズルが好きで、米国のコンピューターメーカーに就職してからも、暇を見つけてはパズルを解くプログラムなどを作ったりしていた。この経験がまさかこのような形で役に立つとは思いませんでした。

これまで経営工学やプロジェクトマネジメントの講座は他大学で担当してきたが、今回の内容は初めてであり、毎週の100分授業に必要な教材を日本語と英語の両方で準備するのは想像以上に大変だった。またこれまで担当したクラスは、多くても20人程度だったのに対し、今回は英語のクラスだけで受講者が200人以上おり、議論を中心に進める授業運営が思うようにいかないこともあった。それでもYouTubeやChatGPTを最大限活用し、飽きずに受講してもらえよう試行錯誤を繰り返した。特に学内システムのMoodleは、小テストやアンケートを簡単に実施でき、投稿者を識別できるのでとても役に立った。

そして、最も憂鬱<sup>ゆううつ</sup>だったのが、授業終了後の学生の評価

である。学生の学びを支援することはこの上なく楽しいことだったが、総勢300人もを適切に評価することは至難である。しかし、評価は講師の重要な職務の一つであり、学生にとっては最優先事項であるため、おざなりにはできない。今回の授業の目的は、知識獲得ではなく、自身で考える力を養ってもらうことなので、知識を問う問題では的外れになる。また、教科書通りの問題ではならぬ新しい気付きも得られないだろう。そうした自己矛盾(パラドックス)に苦しんだ末、最終的には「ロジカル」にも「クリティカル」にもなり切れない世の中の現実を、自らが思い知らされるという大変恥ずかしい結末となった。

もちろん、大変なことばかりではなかった。授業準備は非常に楽しく、興味を持って質問してくれる学生たちの存在は何よりの励みとなった。また、授業前後のプライベートの時間には、レンタカーで大分各所を巡ったり、別府からフェリーで愛媛や大阪に渡ったり、ゆくはしシーサイドハーフマラソン(行橋市)に参加したり、電車で岩国まで移動して観光したりと、さまざまな体験ができた。さらに、学生時代の友人と約40年ぶりに熊本で再会することもかない、心に残る思い出となった。このような貴重な機会を与えてくれたABIC大学講座グループの皆さんに、心より感謝申し上げたい。そして、来期も同じ授業を担当することが決まった。今期の反省を踏まえ、少しでも良い授業が提供できるよう努めたいと思う。

日曜14時15分、羽田空港第2ターミナル。「ソラシドエア 95便大分行きは、ただ今55番搭乗口にて最終案内をいたしております。ご利用のお客さまは55番搭乗口よりお急ぎで搭乗ください」。毎週おなじみになったこのFinal Callを聞く機会もしばらくはないかと思うと少し寂しい。



大教室での授業の様子

## グローバル時代を生き抜く 女性のキャリア形成について

ふじまき なつこ  
藤巻 奈津子 (元 ヘイコンサルティンググループ)

2025年1月29日、大妻中野高等学校にて、第1回ABICグローバル・キャリア・セミナーを担当した。同校は文部科学省のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業におけるグローバル人材育成強化拠点校として選ばれている。WWLは、「高等学校にて、将来イノベティブなグローバル人材を育成する」ための事業であり、今回、ABICと連携した当セミナーが実施された。

私は、商社での勤務経験はないが、2017年ごろに、当時、大学講座コーディネーターをされていた猪狩真弓さんからABICをご紹介いただいた。日系大手電機メーカーや外資系人事コンサルティング会社での勤務、高校・大学・大学院と3回の米国・英国留学、起業などの経験を生かし、現在、ABICから紹介された大学で非常勤講師を務めている。専門分野は、労働市場におけるジェンダー平等、女性のキャリア形成、ダイバーシティマネジメント、グローバル人材教育である。

今回の大妻中野高等学校のセミナーは、「グローバル時代を生き抜く女性のキャリア形成～VUCA時代に自分の道を自分で切り開く力～」をテーマに、進学先が決定している3年生の女子生徒を対象に実施された。参加者は87人であった。学校からの依頼内容は、私自身の経験を基に、グローバルな環境でキャリア形成を目指す女性の生き方について生徒に考える機会を提供してほしいということだった。具体的には、卒業までの時間の使い方、大学での学び、社会に出てからのキャリアについて考えてもらうことが目的であった。

セミナー当日は、冒頭でテーマの重要性を次のように説明した。現代のグローバル社会は複雑性が増し、不確実性が高まるVUCA時代である。日本においては、女性が社会で直面する「壁」や「困難」が依然として多く、例えば、管理職の部長職に占める女性の割合はわずか8.3%<sup>(\*)</sup>である。女性のみならず、男性を含めた組織や社会全体での取り組みが必要だが、女性自身が主体的にキャリアを築く力、多様性を受容する力も不可欠である。大学では、専門知識の習得だけでなく、論理的思考力や多様性の受容力を育むことが重要であり、課外活動や留学などを通じて多様な人と関わり、視野を広げることも重要であるという話をした。また、社会に出た後は「就社」ではなく、自分のキャ



セミナーの様子

リアを主体的に築く意識を持つことが重要であり、終身雇用依存せず、スキルを磨き続けキャリアを継続して、変化に適応する力を持つことで、どのような環境でも活躍できる人材になれると強調した。

セミナー後、参加した生徒から多くの感想が寄せられた。学んだことを振り返り、「行動に移そう」「頑張ろう」と決意する生徒が多かった。また、日本における女性のキャリア形成の課題、VUCA時代に求められるスキル、キャリア継続の重要性について学ぶことができ、挑戦し続ける意識が高まったという意見も多数あった。多くの生徒が自分自身の目標を具体的に考え、どのような行動をとるべきか明確にする機会となったのではと思う。セミナーで説明した現実社会における女性のキャリア形成における課題を真剣に受け止め、自身の未来を考える生徒が多く、有意義なセミナーとなったと感じている。日本社会は確実に女性の活躍の場が広がっており、生徒たちが主体的にキャリアを築けば道は開けると信じている。女性が自身のキャリアを主体的に形成し、より多くのリーダーシップの機会を得ることが、日本社会全体の発展にもつながる。セミナーがきっかけとなり、彼女たちが将来のキャリアについて考え、自信を持って夢に向かって挑戦することを願っている。

(\*) 出典：内閣府 男女共同参画局「令和6年度版 男女共同参画白書」p.122

## 教育支援

## 粟津中学校にて生涯初めて教壇に立つ

はしもと まさし  
橋本 雅至 (元丸紅)

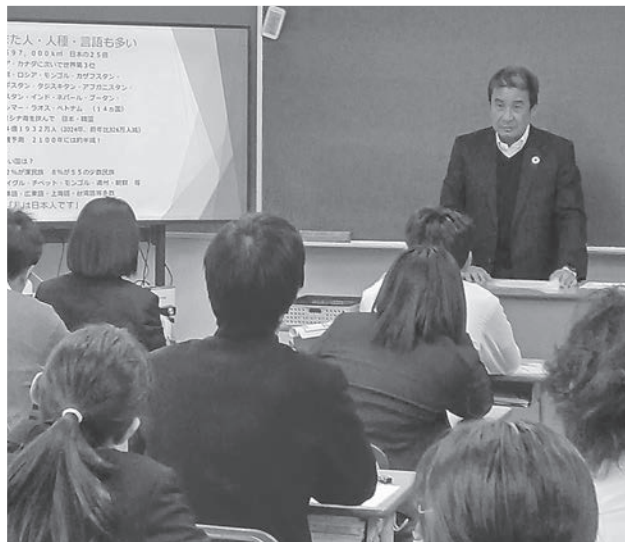
2024年10月に丸紅の先輩OB諸氏の勧めもあり、ABICの会員となった。関西で中国関係に詳しい人材を探しているということだった。私自身は2020年6月に丸紅を退職して以降中国との関わりは全くなく（一方中国の変化は非常に早く）、とても中国関係に詳しい人材とはいえないため入会を躊躇したが、入社後40年ほど中国と関わり、中国の「改革・開放路線」の最中から中国が「世界の工場」と呼ばれGDP世界第2位の大国と化した時期まで18年ほど上海・香港に駐在した経験が社会に役立つのであればという思いで入会を決意した。

今回、天津市立粟津中学校での中国に関する国際理解教育の講師の依頼を受けた。資料を準備するに当たっては、下記のような内容をできる限り分かりやすく、コンパクトにまとめた。

- ① 紀元前から関わりのある中国と日本の一衣帯水の関係
- ② 中国が抱えている国内外の問題（国境、少数民族、人口減少など）
- ③ 清朝末期から中華人民共和国建国に至るまでの欧州列強および日本による侵略の歴史（特に中国人は日本軍が行った蛮行を日本では正確に教えていないという不満を持っており、今回、日本の教科書には載っていない内容も含め説明した）



校長室にて先生方およびABIC講師陣・コーディネーターと  
(左から3人目が筆者)



授業の様子

- ④ 中華人民共和国建国後の大躍進政策の失敗、文化大革命による苦難から米国・日本との国交正常化に至る過程
- ⑤ 「共産党一党独裁」とはどのようなことか
- ⑥ 鄧小平氏が最高指導者になって以降の「改革・開放路線」から「世界の工場」となりGDP世界第2位の大国に至るまでの流れ
- ⑦ 「社会主義」「資本主義」の定義と双方の利点・欠点、鄧小平氏の社会主義的市場主義という政策がいかん時代に即していたのか
- ⑧ 中国駐在時代に経験した日本人と中国人の思考・習慣の違い、日本の常識は決して世界の常識ではなく、いかに柔軟に異文化に対応するのが大切なことか

特に19世紀半ばのアヘン戦争から現在に至るまでの経緯については、一つ一つの事柄を説明するのではなく、「なぜそのようになったのか」という大きな流れに注意して資料を準備し、説明した。

生徒たちの中国に対する理解度なども不明なことから一方的な講義となったが、本来は生徒たちにも意見を交換しながらいろいろ考えてもらう双方向の講義ができれば理想的であったと思う。今回の講義で生徒たちの中国に対する理解が深まり少しでも興味を持ってもらえたらうれしい。



## 在京外国籍高校生への支援活動

ふじはら ひとし  
藤原 仁 (元 住友商事)

私は在職中、先輩OBよりABICの存在および活動目的を紹介され、退職後の2019年に入会した。その後2021年にABICの日本語教師養成講座を受講し、修了後は東京国際交流館での日本語広場にて初級クラス（ゼロ日本語学習者向け）を担当している。さらには、都立A高等学校にて外国籍生徒への日本語指導支援、そして都立B高等学校にて教務担当者と外国籍生徒の保護者（中国人）との面談における通訳支援を行っている。以下に都立A、B両校での活動状況につき紹介させていただく。

A高等学校では、1年生の外国籍生徒約70人（ネパール人、中国人、タイ人、フィリピン人、ウクライナ人など）を対象に、日本語の学習レベル別にクラス分けして、放課後、ABICのコーディネーターを含む5人の活動会員が日本語指導を行っている。

ABICのコーディネーターと学校側が策定した指導目標に沿い、使用する教材の選定、シラバス作成に始まり、文章読解や漢字・語彙・文法の講義、練習問題の作成・採点や解説など、生徒の学校授業につなげる日本語学習支援が主な活動だ。同一クラスでも漢字の読み書きが困難な生徒もいるため、生徒たちの興味を引くような講義が求められるが、楽しさの中にちよっぴり厳しい対応も必要となり、そこがわれわれ講師の腕の見せ所ということになる。

卒業後は弁護士や母国での日本語教師、ネイリスト、看護師になりたい、あるいは起業して成功したいといった明確な目標を既に掲げている生徒もいて、頼もしく感じつつも、卒業後の日本での進路で必要になる正確な日本語の重要性や自身の体験談を講義に加え、日本語学習のモチベーションを維持してもらうことを心掛けている。

B高等学校の保護者面談では、日本で生まれ育ったため中国語が全くできない生徒と、保護者（中国語のみ可、日本語が困難）との間の意思疎通に壁があり、中国語の通訳として学校・保護者・生徒の間のコミュニケーションを支援する役割を担っている。生徒の生活上のトラブル、友達関係、アルバイト、食生活、家族生活など親御さんが心配する問題についても、専門カウンセラーとの間の通訳を担っている。私は在職中、北京での業務研修（OJT）から始まり、通算6回、合計26年余りを中国各地に駐在し事業運営を担う機会を得て、地区・地域により異なる方言や言葉使い（語彙）、習慣（風習）への理解を積むことができたが、保護者が日本の文化や習慣に慣れることは年齢的になかなか難しいと思う。日本しか知らないわが子と考え方やさまざまな事情が違う中で、通訳として双方の理解を促す支援は非常に難しいものの、自身の新たな学びの機会となり、スキルアップにつながる非常にやりがいのある活動となっている。なによりも、日本で生活する外国人の日常の課題克服の一助となれば幸いと感じており、ABICのコーディネーターからアドバイスをもらいながら「元気に明るく楽しく、そして真剣に」をモットーに活動することができている。

日本人学生や社会人の外国離れが進んでいるといわれるが、外国籍の生徒や学生との交流を通じた相互理解の機会には貴重であり、これからの日本に不可欠であると感じている。

この貴重な機会を与えてくれたABICのコーディネーターおよび関係者にこの場をお借りし感謝申し上げます。



放課後の日本語指導の様子

## 留学生支援

## ABIC将棋教室

いいだ のぶやす  
飯田 修康 (元 大金商事、慶応大学将棋部OB)

将棋界は藤井聡太七冠が1強でマスコミでも必ず取り上げられていて、将棋を知らない人にも大人気である。大山名人、中原名人もすごいが、なんといっても羽生永世七冠である。タイトル99期は前人未踏で、囲碁の井山七冠と一緒に2018年国民栄誉賞を受賞されている。残念ながら100期は難しくなっているが、藤井さんなら100期ぐらい軽く行きそうだ。升田幸三、大山康晴が長嶋茂雄、王貞治なら、藤井聡太は大谷翔平だ。前例がない大スターである。

昔の棋士は酒やたばこ、マージャンは当たり前で武勇伝に事欠かないが、現在は品行方正な方が多い。藤井さんからタイトルを奪取した伊藤匠叡王の師匠の宮田八段は弟子にタイトルを取るまでは酒やマージャンを禁止したそうで、そのおかげか弟子は皆強い。昔は将棋を覚えようとするれば新聞、雑誌、親や知人から学ぶか学校や将棋クラブに行くしかなく、プロの将棋は新聞や雑誌で結果を知る以外なかった。NHKの衛星放送で名人戦や竜王戦の最終日が実況放送されたのが驚きで楽しみだったが、今はパソコンやスマホで簡単にプロの対局が観戦できるし、ゲームだけでなくいつでも対人で対局ができる便利な時代だ。AI将棋も20年くらい前から急速に強くなり、2012年の第1回電王戦のあたりから互角またはプロ棋士をしのぐ力を発揮するようになった。2017年にはAIが佐藤名人に勝った。プロもAIを参考にしながら対局する時代だ。日本将棋連盟は北米、南米、欧州、東南アジアに支部を作って国際的な普及にも努め、日本で国際大会が開かれているが、囲碁と違い外国人のプロ棋士はまだいないようだ。

将棋は囲碁と違い、男性は「プロ棋士」で女性は「女流棋士」である。プロ棋士養成機関である奨励会の三段リーグで、春秋の2回それぞれ上位2人、年4人が四段になり正

式なプロ棋士になる。満26歳の誕生日までに四段にならなければ奨励会を退会になる。2005年に特例となる瀬川晶司六段のプロ編入以来、従来は実質一度きりの挑戦だったプロ編入試験への再挑戦の道が開かれた。2024年に西山朋佳女流三冠が挑戦したが、残念ながら2勝3敗で敗れ初の女性プロ棋士を逃した。再挑戦を期待したい。

ABIC日本文化教室の将棋教室は月1回土曜日に2時間、お台場にある東京国際交流館で開催しており、私は前任の三井物産の方より引き継ぎ、早いもので15年になる。留学生は将棋が初めての人が多く、テキストで駒の種類、駒の動き、禁じ手などのルール、作法などを教え、その後実践してレビューを行う。詰将棋も上達には欠かせない。月1回では足りないが、短期間でやめる人が多いのが現状なのでやむを得ない。以前は中国か韓国からの留学生がほとんどで、参加者は月にせいぜい1人か2人で、ゼロの時もあった。ABICのコーディネーター3人の熱心なPRのおかげか、留学生の日本文化に対する志向の変化のためかは分からないが、2024年11月に新しい参加者が7人も来たのには驚いた。残念ながらその後定着はしていないが、それでも非漢字圏の東南アジア、北米、南米、欧州、ロシアなどの国々からの留学生が徐々に参加するようになったのはうれしい。この傾向が継続して定着することを期待したい。参加者の内訳をみると、意外と女性の参加が多いのが最近の特徴である。いろいろな国からの留学生が参加することによって、将棋が非漢字圏でささやかでも普及することになればうれしく思う。非漢字圏の人にとっては、将棋の駒が漢字で書かれており、その漢字の意味が分からないのがハンディキャップであるのは間違いないが、それを何とか克服して将棋教室に参加してもらいたい。



将棋教室の様子

## 留学生支援

## 留学生支援バザー

留学生支援グループコーディネーター **たけはら まさかず** **竹原 正和** (元 伊藤忠商事)

## 東京国際交流館

2024年11月23-24日の両日、恒例の秋の新入館生歓迎バザーが東京国際交流館で開催された。売り上げは15万6千円で近年にない高額となり、ABICの必要経費を差し引きバザーの運営を担うRA<sup>(※)</sup>に留学生サポート活動資金として提供させていただいた。134箱もの品物をご寄贈いただいたABIC会員や日本貿易会会員各社社職員の皆さまに厚くお礼申し上げる。

初日はすさまじい強風で屋外での陳列が難しいほどだったが、冬用衣類、カバン類、学用品、生活必需品など豊富な品揃えが人気を博し、会計は長蛇の列で大盛況だった。RAはポップコーンを提供したり、BGMを流したりと工夫を凝らしていた。会計係は素早い手さばきでタブレットに

商品名、料金を入力し、売り上げの即時把握など運営の効率化に貢献していた。2日目も、館内放送やSNSを活用して呼び込みを図ったり、数個の品物をまとめて廉価販売したりした努力が実り、結構な数かはけた。



## 兵庫国際交流会館

2024年11月9日、恒例の秋の新入館生歓迎バザーが兵庫国際交流会館で開催された。あいにく多くの館内生が通う大学の学園祭と重なり参加者は少なく、既入館者を合わせて約40人だったが、ABIC会員や日本貿易会会員各社社職員の皆さまから57箱もの品物をご寄贈いただき、売り上げは前回を上回る約4万円となった。この売上金は、ABICの必要経費を差し引きバザーの運営を担うRA<sup>(※)</sup>に留学生サポート活動資金として提供させていただいた。ご支援いただいた皆さまに厚く感謝申し上げます。

さまざまな品物の中でも特に生活必需品は廉価で販売され、来日間もない学生たちから非常に好評だった。アプリ

関西デスクコーディネーター **か し む ら かおる** **鹿志村 馨** (元 住金物産)

力からの学生は初めて迎える日本の冬に備え冬用の衣類を多く買い求めていた。参加できない友人から依頼されて何度も会場を訪れる学生もよく目に付いた。



(※) RA (Resident Assistant) : 交流館に居住し、同館に入居する外国人留学生などの日常生活や勉学上のサポートなどを行う日本人大学院生。

## 事務局だより

## 関西地区会員懇親会を開催

2025年2月28日(金)、ホテルグランヴィア大阪「鶴寿の間」において関西地区会員懇親会を開催し、活動会員50人にご参加いただきました。宮本理事長によるあいさつ・乾杯発声に始まり、会員の皆さまに和気あいあいとご歓談いただき、盛会のうちに閉会しました。



宮本理事長あいさつ



参加者全員で

## 会員の種類

種類	内容	年会費
正会員	センターの目的に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。(理事会の承認を得て入会)	法人および団体 1口 50,000円
		個人 1口 10,000円
賛助会員	センターの目的に賛同し、会費を納める個人、法人および団体。	法人および団体 1口 10,000円
		個人 1口 5,000円
活動会員	センターの目的に賛同し、活動に参加しようとする個人。	なし

(2025年2月末現在)

### 正会員

#### 法人・団体 (17社、1団体) 〈社名・団体名五十音順〉

- 〈10口〉 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) (一社)日本貿易会 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)  
 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 日鉄物産(株) 阪和興業(株)  
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) 三洋貿易(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

#### 個人 (12名) 〈敬称略・氏名五十音順〉

- 〈3口〉 中村邦晴  
 〈1口〉 池上久雄 市村泰男 岩城宏斗司 岡 素之 國分文也 小林栄三 小林 健  
 佐々木幹夫 寺島実郎 宮原賢次 吉田靖男

### 賛助会員

#### 法人・団体 (3社、1団体) 〈社名・団体名五十音順〉

- 〈2口〉 (公社) 東京のあすを創る協会  
 〈1口〉 (有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ JAPAN WAY(株)

#### 個人 (171名) 〈敬称略・氏名五十音順〉

下記は2024年11月以降にご入会いただいた方々です。

- 〈2口〉 奥谷直也 倉光恭三 〈1口〉 片桐二郎 関原滋彦 中野教子 村田三七男 和又真一郎

### 活動会員 3,018名

## 賛助会員入会のお願い

ABICの目的にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、  
 ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

#### 会員入会のお問い合わせ・連絡先

#### 特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-1 霞が関コモンゲート西館20階

TEL : 03-6268-8604 FAX : 03-6268-8652 E-mail : mail@abic.or.jp